

一刀領談

本紙客員論説委員 下條正男



しもじょう・まさお
長野出身。国学院大学院
博士課程修了。1999年
から拓殖大教授を務め、昨
年3月末で退官。現在は本

紙客員論説委員のほか、島
根県立大と東海大の客員教
授。島根県の第5期竹島問
題研究会の座長を務める竹
島研究の第一人者。71歳。

渋沢栄一に学ぶ



韓国警察庁長官の竹島上陸を受け、
記者団の取材に「到底受け入れられ
ず、極めて遺憾だ」と述べる林芳正
外相＝2021年11月16日、外務省

本家や大企業の利益のため
に仕事をするとは馴染ま
ず、本来の勤労意欲までも
削いでしまふ。

■対抗の動きなし

渋沢が「国異なれば道義
の観念もまた自ら異なる」
と述べたことは、「合本主
義」と欧米流の資本主義は
同じではないということだ
る。

これは戦後導入された議
会民主主義も、また同じで
ある。昨年11月16日、韓国

「道義」の違い認識して

「日本の資本主義の父」とされる渋沢は、「資本主義」とは言わずに、一人一人が協力して事業を進める「合本」を唱えて、道徳経済を重視していたからだ。この視点は、官主導の「成長と分配の好循環」や経済政策としての「アベノミクス」とも違っていた。

渋沢が尊重したのは公益で、「仮に一個人のみ大富豪になっても、社会の多数がために貧困に陥るような事業であったならば、如何なるものであろうか(中略)、故に国家多数の富を致す方法でなければいかぬ」とするように、一部の資本家だけの「儲け主義」を嫌ったからである。

目的としたのは、資本家と労働者が一家のような関係になることである。渋沢であれば、貧富の格差を助長することになった非正規雇用のような形態は、とらなかつたはずである。これは渋沢が目指した「合本主義」と、今日の「日本の資本主義」は、似て非なるものだということである。

■「合本」欠き劣化

渋沢には「論語と算盤」

という著書がある。そこに書かれている内容は、1990年代、日本のバブルがはじける直前まで評価されてきた「日本の経営」に近いものがある。その時代の経営者たちは道徳(論語)と経済(算盤)の両立を図って国益を念頭に置いていた。そのため「日本の経営」華やかにし頃の企業トップには人格者が多かった。バブル経済が崩壊すると「日本の経営」は否定されて、年俸制や非正規雇用の導入が検討され始めた。以来日本経済の低迷が続き、今日に至っている。

「青天を衝け」を視聴した多くの人が、渋沢の生き様を清々しいものとして受け止め、共感したのは、そこには常に「道徳があつたからである。」口ナ禍の日本

社会が強制されることなく、マスクを着けているのも、その「道徳」と無関係ではない。日本社会には無意識のうちに「道徳的に判断する傾向があり、『青天を衝け』は、そんな日本人の心の琴線に触れたのである。

バブル崩壊後、日本ではその道徳を重んじた「日本的経営」が否定され、欧米流の年俸制や非正規雇用が導入されて、貧富の格差が広がった。渋沢が唱えた資本家と労働者が一体となる「合本」が生かされなくなつてしまつたからだ。

渋沢は「仕事が国家に必要であつて、又道理に合するやうにして行きたいと心掛けて来た」とするが、そういう経営者であれば労働者も信頼して合力する。日本の風土には、一部の資

の警察庁長官が竹島(島根県隠岐の島町、韓国名・独島)に上陸した。自党内には「対抗措置チーム」が結成されたというが、まだ動きがない。何をしたらよいのか、分かつていないのだろう。

韓国が歴史問題で日本攻勢をする際は、決まって日本の「道義」を標的として謝罪を求める。これは道徳的な日本人の心性を熟知しているからだ。

それを理解しないで経済的制裁など強硬手段を講ずれば、どうなるのか。朝鮮半島は日本とは違い、「道徳」ではなく、「法家思想」社会である。それを認識し対応しなければ、法を恣意的に解釈して同様な攻勢を繰り返すだけである。

■ 随時掲載 ■